

2022年3月20日（日）

宣教 「仕える者となるために」

聖書：マルコによる福音書9章30節～37節

みなさん、おはようございます。

今日の聖書箇所には、イエスが山上の変容の山から降って、ふもとで汚れた霊に取りつかれていた子を癒された後のことが記されています。

イエスが愛する弟子たちに、再び自分の死と復活を予告する場面と、

「いちばん偉い者」について語っておられる箇所です。

聖書に心の耳を開いて聞きましょう。

「◆再び自分の死と復活を予告する」場面です。このイエスの死と復活の予告は2度目となります。後にもう一度予告されます。

30:一行はそこを去って、ガリラヤを通過して行った。しかし、イエスは人に気づかれるのを好まなかった。

イエスは、神の国は近づいたという宣教をこのガリラヤ地方から開始されました。そして各地をまわって、またガリラヤ地方に戻って来られたのです。

しかし、主イエスは人に気づかれるのを好まなかったようです。この時、すでにイエスご自身はユダヤの中心都市、エルサレムでの死を心に覚えておられたのだと推測するのです。徐々に寡黙に、言葉数が少なくなっていくように思えるのです。ユダヤ当局者のイエスに対する目は厳しくなって行くことを感じておられ、状況は緊迫して行ったようです。

イエスは「人の子は、人々の手に引き渡され、殺される。殺されて三日の後に復活する」と語られました。

イエスは、弟子たちに、人の子、つまり神からの派遣されるメシア、救い主は、人々の手に引き渡されることを知っておられたのです。「引き渡される」ということばは意味深いことばだと思います。イエスは、ユダヤ人の権力者たちに引き渡され、十字架の処刑の時には、ユダヤを支配していたローマ軍に引き渡されたのです。イエスを裏切った弟子のユダを始め自分の味方であり、友であるとさえ思っていた人たちが、事実、結果的にはイエスを十字架への道へと引き渡して行ったのだと言えるでしょう。弟子の代表格のペトロは、イエスが捕えられた時には、「イエスを知らない。」と言いました。黒人霊歌の讃美歌にも「あなたも見ていたのか」とあります。また讃美歌493番3節のことば「世の友、われらを捨て去るときも」ということが起こった詩、これからも

起こりえるのです。自分を含めて人間存在の罪深さゆえの悲しさです。きっとわたしも十字架を前にしたら逃げただろうと思うのです。自分の罪を思わずにはおれません。

以前もお伝えしましたが、島田 巖牧師の最近出された短歌集にありますように「イエスとは自分の弟子に捨てられて抜け殻になった神の独り子」なのだと思うのです。

ここでの聖書箇所には十字架という言葉はありませんが、2000年前当時、十字架の刑はもっとも厳しい、屈辱的な処刑方法だとみなされていました。その十字架刑によってイエスは処刑されいのちを奪われたのです。しかし、忘れてはならないのは、決して十字架の死で終わるのではなく、「殺されて三日の後に復活する」ということです。復活は希望です。そこから見る時、「引き渡される」ということは、人間の罪深さと共に、それにもかかわら人間の罪をゆるすために行われた神の救いの計画実現のための引き渡しでもあったのだと思えるのです。つまり、わたしたち人間のツ罪深さと罪のゆるしが重なるのが主イエス・キリストの十字架と復活の出来事なのです。まさに主イエスの十字架と復活は、わたしたちのためであり、人類、被造物全体のためであったのです。

後にできたイエスの群れである教会の信仰告白である使徒信条には「十字架につかれ、死んで葬られ、よみにくだり、三日目に死人のうちからよみがえり、天にのぼられました。そして全能の父である神の右に坐しておられます。そこからこられて、生きている者と死んでいる者とをさばかれます。」と告白されています。また「罪のゆるし、からだのよみがえり、永遠のいのちを信じます。」と告白されています。

弟子たちは、イエスの死の後に、よみがえりのイエスとの復活体験をしました。その聖書にある弟子たちの証言をわたしたち信仰者は信じているのです。復活体験は、証言であり希望としての確信となるのです。

イエスから死の予告を聞かされた12人の弟子たちは

32節にあるように、弟子たちはこの言葉が分からなかったが、怖くて尋ねられなかった、のです。人間は心の内深くにあることは、なかなか尋ねることが出来ないのです。

この時は、イエスのことばを理解できなかったのです。また、イエスに怖くて尋ねることもできなかったようです。

このイエスの苦難と死の予告に続いて、「いちばん偉い者」についての教えがあります。

◆いちばん偉い者

イエスと弟子たちは、共に道を行きながらカファルナウムの町、村にやって来ました。カファルナウムの村は、イエスが宣教を開始された村です。最初にガリラヤ湖のほとりで、シモン・ペトロと兄弟アンデレを弟子として選び、招かれました。彼らの家がありました。イエスは、かつてペトロの家でしゅうとめの熱をさげるといふ癒しを行われました。イエスの言葉と愛のいやしの業のスタートの場所です。

今でもその跡地に建てられた記念の建物が残っています。

おそらくその家に入られ、すこしほっとされたのか、イエスは、その時、弟子たちに、「途中で何を議論していたのか」とお尋ねになったのです。

34:彼らは黙っていた。途中でだれがいちばん偉いかと議論し合っている

だからである。「偉い者」とは、存在が大きな者という意味があるようです。弟子たちは、そのような話をしていたことをイエスに知られることを

心苦しく、また恥ずかしく思ったのかもしれませんが。彼らは黙ったままなのです。まことに弟子たちは人間的だと思います。わたしたちでも、自分の心の思いを人に知られたら、たまったものではないでしょう。しかし、イエスは弟子たちの話していたことをすべてご存知だったのです。神の子イエスは、人の心の思いを見抜く力を神さまから与えられていたのです。神を侮ってはいけない、ということばを思います。人をごまかせても、主イエスや神さまは断じて誤魔化すことはできないのです。人は外側を見ますが、神さまは心の内をも見ておられるのです。

そのような弱い、欠けた所のある人間をも神さまは憐み、イエスさまは慈しんでくださる方なのです。ですから神さまを敬っても、ビクビク怯えることはないのです。主よ、弱いわたしをおゆるしくくださいと心から祈れば良いのです。そして、イエスは座って十二人を呼び寄せて言われました。「呼び寄せて」という言葉も心に残ることばです。「こっちにおいで。わたしの方に来なさい。」と親しみのこもった呼びかけです。そしてイエスさまは愛する弟子たちに丁寧に心から語られました。

「いちばん先になりたい者は、すべての人の後になり、すべての人に仕える者になりなさい。」ここに集ったわたしたちも、今日この場所でイエスさまからこの言葉を聞くのです。「いちばん先になりたい者は、すべての人の後になり、すべての人に仕える者になりなさい。」

弟子たちが、12人の中でだれがいちばん偉いかと議論し合っていることを知っていたイエスさまは、「いちばん先になりたい者は、すべての人の後になり、すべての人に仕える者になりなさい。」と教えられました。これは見せかけ

のことではないのです。心からそうしなさい、ということです。

イエスの弟子たちには、そのようにできる自由が与えられているのです。宗教改革者のマルチン・ルターのキリスト者の自由という本に記されたことばを思い出すのです。「キリスト者はすべてのものの上に立つ自由な君主であって、何人にも従属しない。キリスト者はすべてのものに奉仕する僕であって、何人にも従属する。」 わたしはこのことばを、自分なりに次のように理解するのです。「キリスト者は誰の奴隷でもないけれども、神と主イエスから与えられた自由によって、すべての人に仕える者である。」と。

この「仕える」という言葉は、「神を礼拝する」ことにつながるのです。

ドイツ語で「礼拝」のことは、*Gottesdienst* と言われますが、これは神さまに仕えること、神への奉仕という意味なのです。

「仕えることは、ただ「ねばならない」ということではなく、その自由がある、ということなのです。仕える力はそのやり方は、神さまが必ず与えてくださるのです。

そして、主イエスは歴史においてよく知られている有名な行動をされました。

36:そして、一人の子供の手を取って彼らの真ん中に立たせ、抱き上げて言われた。

37:「わたしの名のためにこのような子供の一人を受け入れる者は、わたしを受け入れるのである。わたしを受け入れる者は、わたしではなくて、わたしをお遣わしになった方を受け入れるのである。」これがイエスさまの仕える心であり、姿勢であり、態度です。

約2000年前、子供は、人格は認められておらず、その家の道具のように思われていたようです。世界中、そのような扱いだっただのではないかと思われる。大人の目にかなう子は、ペットのように可愛がられることもあったでしょうが、いざとなれば金銭のために売り飛ばされるというようなこともあったのです。今でも児童虐待はあとをたちません。

イエスはもっとも小さな存在に目を向け、抱き上げられたのです。ここに神の愛があるのです。ここにイエスの溢れる愛が、神の愛が表れているのです。仕えることは、愛の心から出てくるのです。それが自分を回りを生かすのです。もし奉仕が義務や形式だけになれば、その人を苦しめ、回りを苦しめることにもなりかねないのです。そして奉仕は、神を礼拝することから始まるのです。礼拝をできなくするような奉仕は、そのやり方をみんなで祈って語り合っって考えて行く必要があるのです。

37:「わたしの名のためにこのような子供の一人を受け入れる者は、わたしを受け入れるのである。わたしを受け入れる者は、わたしではなくて、わたしをお

遣わしになった方、つまり天の神さまを受け入れるのである。」キリスト者も教会もいつの時代もどんな状況になっても覚えておかなければならないことなのだ、今日再び教えられます。神さまを敬う人は、人を敬うのです。

主の平安を祈ります。